

卓越大学院プログラム現地視察報告書(令和4年度)

卓越大学院プログラム委員会

機 関 名	東京大学	整 理 番 号	1805
プログラム名 称	生命科学技術 国際卓越大学院プログラム		
プログラム責任者	岡部 繁男	プログラムコーディネーター	吉川 雅英
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 医・工・薬・理より、広いバックグラウンドを持つ学生を幅広く獲得しているが、中間評価結果を受け、さらに広いバックグラウンドをもつ学生や留学生の獲得について努力を継続する方針である。 ・ 令和元年度より医学系基礎・臨床、工学系、薬学系、理学系ともに、毎年2倍を超える応募者数があり、優秀な学生が獲得できている。学術振興会 DC 採用実績も良好である。コロナ禍ということもあり、外国人留学生割合は高くはないが、留学生を増やすべく、英語の募集要項を充実させている。 ・ 多彩な学術分野からの教員陣のサポートにより、学生の専門能力を高める一方で俯瞰力及び展開力を養うための学習環境が整備されてきている。また、国際性の推進のため、7名の外国人プログラム教員を選任するとともに、シンガポール国立大学より講師を招き、国際的なキャリアパスの指導を行なっている。さらに、世界のトップレベルの研究者による国際卓越講義も実施されており、学生も研究へのアドバイス等を得られる機会として積極的に参加・活用している。 ・ 優秀な学生は、本プログラムを活用して研究の幅を広げ、将来の研究・就職活動に活かしている。一方、自分の研究領域にしか興味を持たず、経済的支援以外にメリットを感じていないケースも散見される。このような学生に対しても、通常の博士課程では得られない幅広い知識・経験の習得、専門性や独創力を涵養するような教育が望まれる。 ・ 給付型だけではなく、オンキャンパスジョブを通じた実践的な貢献・経験の対価という形でも学生の経済支援がおこなわれており、教育・研究・交流など多面的に学生の成長に寄与している。 ・ 修了者の進路を見ると、産 26 名・学 24 名・病院 6 名・官 1 名・公的研究機関 1 名などであり、本プログラムにより学生が幅広い活躍の場を得ている。 ・ 成果も多く実績も上がっているが、今後、大学院改革につながるような、新たな融合領域のさらなる教育・研究成果が期待される。 <p>【大学院教育全体の改革への取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前総長の「知のプロフェッショナル」人材の育成を目指して、本卓越プログラムを中核として継続的にサポートする体制を整えてきていたが、新総長のもとにおいても、「知をきわめる」「人をはぐくむ」「場をつくる」という視点に基づき、引き続き本プログラムへの支援体制の継続と発展的な推進に向け取組が進められている。 ・ 事業の継続・発展については、総長中心の大学改革構想の中で、特に経済的なマネジメントが充実している。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高度な「知のプロフェッショナル」を養成する本プログラムでは、プログラム全体として学生のサポート体制（メンター制度など）を充実させることが必要であろう。今 			

後、プログラム全体としてより実効的なサポート体制を期待する。

- 俯瞰講義、社会実装論、実験実習、実践演習（海外研修含む）、特別演習、全体会議・コロキウムについてはオンライン開催を併用しながら、円滑に実施されている。しかし、生物系でない工学系学生を含め、内容の理解・共有に務め（講義導入部分で、平易で分かりやすい説明を行うなどの工夫が必要である）、また、講師についても学生の要望を取り入れることも考慮する必要があるだろう。
- 一部学生からは、今まで知らなかった企業家や海外の研究者と話す機会があり、将来の進路を決める上で有益であったという意見があった。一方、多くの学生から、学生同士や教員との交流の機会が少ないことが不安であるとの意見があり、今後、交流不足の改善が望まれる。
- コロナ禍の影響もあるが、学生からはさらなる交流・他の学生と知り合う機会を増やしてもらいたいという要望が出されており、例えばプログラムとして立ち上げられている Slack 等の SNS の積極的な活用を促すような工夫や仕掛けづくりが期待される。